7月13日　サウロを回心させる復活のキリスト 聖書黙想

テキスト　使徒言行録 9章1〜19節

〈救済史カリキュラムの文脈〉

聖霊降臨日から始まった救済史の終わりの時代をたどるカリキュラムは、ステファノの説教と殉教を契機として、福音がエルサレム・ユダヤ・サマリア・地の果てまでも伝播してゆく出来事を、聖霊の働きとして語り継ぎます。とりわけ、復活の主イエスによるサウロの回心は、シリアのアンティオキア教会から派遣される宣教師の召命へと整えられ、それに応えた使徒パウロの働きが、小アジア・ギリシアにおける異邦人伝道に用いられます。救済史の終わりの時代は聖霊による使徒の働きに始まり、福音の全世界的宣教がサウロ回心の出来事、すなわちパウロの召命体験に始まったことを、喜びをもって語り伝えましょう。

〈単元の主題と目標について〉

「サウロを回心させた復活のキリスト」。この歴史的な出来事を、聖書が伝えるままに受け入れ、生徒たちと分かち合うことが、単元の主題です。その際、「目からウロコを落とし、キリストの証人として立てる、神の力と愛に与かろう」と生徒らに呼びかけることを目標とします。

その際、注意が必要です。サウロ回心の出来事は、使徒時代に独特の現象であるとともに、救済史において固有の意味を持ちます。これを弁えた上で、パウロの召命に類似した体験が、キリスト信徒に普遍的に起こり得るとともに、その信徒が生まれ育った教会にとって、その時代と地域において、福音宣教の働きに固有の意味を持つことを厳粛に受け留める必要があります。

〈サウロ回心の出来事の救済史における固有性〉

ダマスコ途上の体験に至るまでの、サウロという人物、その半生について振り返ります。彼はローマ帝国キリキヤ州のタルソスに生まれたユダヤ人です。彼の父親はローマ市民権を持ち、タルソスでも名のあるユダヤ人一家でした。「サウロ」はユダヤ人として付けられた名ですが、ローマ市民権を持つ者として「パウロ」という名を与えられました。ギリシア風の大都市タルソス出身で、生まれながらに自由人であるパウロでしたが、それ以上に、ヘブライ人の先祖と伝統を持ち、その教育を受けていることをサウロは誇りとしました。タルソスを旅立ってエルサレムに行き、当時最も偉大なラビ・ガマリエル門下で教育を受け、ユダヤ教の専門的な知識と実践を身に付けて、イスラエルの教師となる道は前途洋洋でした。特に、ファリサイ派の思想は彼の心を捉えたようで、律法の伝統的な解釈を学び、それを実践することこそ、神に受け入れられる道であり、来るべき世の命に与かる条件であると信じて疑いませんでした。

時は紀元30年から33年、希望と野心に燃える若者サウロが闊歩したエルサレムに、「ナザレ人の運動」が起こります。「十字架で死んだイエスこそメシアである」との主張は、サウロにとっては、余りにも馬鹿げていて、真剣に取り上げる価値もない思想でした。「木にかけられた者は神から呪われている」と律法（申命記21:23）にあるからです。十字架にかけられたイエスは神から呪われた者であって、神の特別の愛顧の対象であるメシア（ダビデの再来）であるはずはないと思ったからです。しかし、この一派は無視できない存在となります。「イエスは復活した」との教えを、律法学者や神殿祭司までもが信じるようになったからです。

神殿を含む、イスラエルの秩序を乗り越える、新しい秩序の創始者となった「イエスこそメシアである」。そう主張する思想は危険であり、脅威であると感じたサウロは、エルサレム教会の説教者「ステファノの殺害に賛成し」（使徒言行録8:1）、「この道を迫害し、男女を問わず縛り上げて獄に投じ、殺し」（使徒言行録22:4）、「至るところの会堂で、しばしば彼らを罰して、イエスを冒涜するよう彼らに強制し、激しく怒り狂って、外国の町にまでも迫害の手を伸ばし」（使徒言行録26:11）ます。大祭司カヤパから得た捜査令状

を手に、シリアに赴いて、ダマスコへ逃げたナザレ人イエスの一派を逮捕しようと意気込んだのです。その途上で、サウロは、太陽よりもまばゆい天からの光を見て、地面に倒れ、死んだはずのイエスの声を聞くのです。「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」（使徒言行録9:4,5）。

このダマスコ途上の体験がサウロにもたらした決定的影響は、彼が「洗礼を受けた」（使徒言行録9:18）ことです。「イエスの名を唱えて洗礼を受け、罪を洗い清められた」（使徒言行録22:16）ことです。この出来事がサウロの「回心体験」と言われる所以です。復活の主イエスとの出会いによって、彼はキリスト信徒の主張が正しかったことを知ったのです。「イエスこそメシア、神の子（神そのもの）である」（ガラテヤ1:12,16）と悟ったのです。それで彼は「ナザレ人イエスを迫害する者から、罪を赦されて、神の子イエスを信じる人に」回心させられたのです。彼をユダヤ教徒からキリスト信徒に回心させたのは、神の偉大なる御業でした。

〈パウロの召命体験の福音宣教における普遍性〉

「行け、アナニア。あの者（パウロ）は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたし（イエス）が選んだ器である」（使徒言行録9:15参照）。

ダマスコ途上の出来事は、サウロの回心体験であると同時に、彼の召命体験でもありました。イスラエルの人びとの前に、また異邦人とその王たちの前に、神の子イエス・キリストの御名を運んでゆく「神の選びの器」としてサウロは召命を受けたのです。復活の主イエスの口から出る御言葉を聞き、まさに神の独り子なる正しい方と出会い、キリストの御心を悟らされた彼は、「その見聞きしたことの証し人」となるように召されたのです。サウロをユダヤ人の中から、ローマ市民の中からも救い出し、新しいイスラエルであるクリスチャンとして回心させ、神の子イエス・キリストの御名を運ぶ選びの器として召し出した神は、パウロを福音宣教者として派遣なさいます。人びとを神に立ち返らせ、赦しと和解に与からせるためです。回心体験とともに召命体験をしたパウロは「イエスこそ神の子であると宣べ伝え」（使徒言行録9:20）、「イエスがメシアであると論証し」（使徒言行録9:22）たのです。

宗教改革者カルヴァンは、パウロの召命体験を、クリスチャンの召命体験の雛形と理解しました。「選びの器（選ばれた機関）とは、優れた教職者と考えられる。この機関 organ という語は、神が御心に従って人の働きをお用いになる以外に、人は何も行うことが出来ないことを明示する。私たちは神の器 vessel ならば、神こそが創造主であり、神だけが器を用いる力を手にしておられる。この箇所（使徒言行録9:15）で、キリストがパウロについて仰っていることは、一様に、すべての者にあてはまる。従って、人がいかに熱心に働き、その職務を勇敢に行ったとしても、決して自分を称賛する理由とはならない」（J. カルヴァン『新約聖書注解―使徒行伝』）。

〈生徒らに呼びかけること〉

サウロ回心の出来事は、救済史において、特に旧約の律法と預言を福音理解に結びつける上で固有の意味を持ちます。パウロの召命体験は、福音宣教における復活の主イエスのご支配と聖霊のお導きを証しする出来事です。

教会学校（日曜学校）に集う生徒たちの多くは教会員の子どもたち、幼児洗礼を受けており信仰告白が待たれる未陪餐会員でしょう。そうではない生徒たちもまた、やがては信仰を告白して洗礼を受けることになるでしょう。

信仰告白を求められる生徒らには、サウロ回心の出来事に「キリストに従う」という信仰告白の本質を見て取るよう呼びかけることが必要です。また、伝道に召される生徒らには、パウロの召命体験から「聖霊に仕える」という福音宣教の要請を弁え知るよう呼びかけることが大切です。

一人の生徒が信仰を告白すること、そして召命に応答すること。この出来事は、100％人間の営みであると同時に、100％神の御業です。主イエスに結ばれた者が体験する、厳かな恵みの成就です。

（二宮　創）

7月13日　サウロを回心させる復活のキリスト 説教展開例

テキスト　使徒言行録 9章1〜19節
子どもカテキズム　問29
参照教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問30〜32
ウェストミンスター大教理問答 問66〜68

〔単元のねらい〕

救済史の文脈において、キリスト教会を迫害したサウロがキリスト信徒に回心する出来事は、旧約の律法と預言がキリストにおいて成就したという福音理解へと彼を導くために、復活の主イエスご自身が起こされました。サウロの回心の出来事に「キリストに従う」という信仰告白の本質を見て取ることができます。また、キリストに従ったパウロが福音宣教者に召される体験は、信仰告白して洗礼を受けたキリスト信徒が、聖霊によって、それぞれの時代と地域における教会の伝道の働きへと召されることの雛形です。パウロの召命体験から「聖霊に仕える」という福音宣教における要請を弁え知ることが大切です。これらのことを分かち合い、呼びかけるための説教を祈り求め、書き留めましょう。

キリストに従う人になる

「どうすれば、信仰告白できますか。信仰告白したら、どうなりますか」。こんなふうに、いつか質問してみたい。でも、まだしなくていいかも。じゃあ、いつすればいいのかな。今でしょ！。ということで、今日は皆さんが心の内に秘めている大切な質問に、ご一緒に取り組みたいと思っています。日曜学校の教師が、答えを持っているのではありません。生徒である皆さんが、一人一人自分で、答えを見つけていただきたいのです。そのためのお手伝いをさせていただきます。

幼児洗礼を受けているあなたは、信仰告白することを求められています。まだ洗礼を受けていないあなたも、やがて信仰告白して洗礼を受ける日が訪れます。つまり、洗礼の後か前かにかかわらず、今ここにいる皆さんは、信仰を告白するよう導かれているのです。導いているのは、日曜学校に奉仕する教師たちを訓練し、派遣しておられる主イエスさまです。「どうすれば、信仰告白できますか。信仰告白したら、どうなりますか」。この問いは、主イエスさまが聖霊を遣わして、あなたの心に抱かせた問いなのです。この問いに答えるためには、聖霊の導きによって主イエスさまの御心を知ることが、どうしても必要です。

今日の聖書の箇所は、ひとりの人間に信仰を抱かせ、それを告白させ、洗礼を受けさせる主イエスさまの御心を知るためには、絶好の箇所です。「サウロ」という名のユダヤ人、生まれながらにローマ市民であるため「パウロ」と名乗った人。彼はユダヤ人の家庭に生まれた子どもとして、十戒を教えられ、それを守って生きる青年へと成長しました。生まれ故郷タルソスから都エルサレムへ留学し、最も偉大な律法学者ガマリエルの門下でユダヤ教の専門知識と実践を身に着け、イスラエルの社会で教師となる前途は洋洋でした。

その折も折、紀元30年ごろ、エルサレムに新しい思想と運動が起こります。「十字架で死んだナザレのイエスこそメシア（キリスト）である」。こう主張する者たちが現われたのです。十字架という最も呪われた処刑方法で死んだ罪人が、イスラエルの待ち望む救い主メシアであるはずがない。サウロは鼻で笑い、聞き流していました。しかしそうもしてはいられなくなります。「イエスは復活した」という教えを、律法学者や神殿祭司までが信じるようになったからです。イスラエルの宗教と社会の秩序をひっくりかえす、イエスの

弟子たちを無視できなくなったのです。

サウロは、厳格なユダヤ教ファリサイ派の青年として、ひたすら信仰的な熱心から、エルサレム周辺にいたイエスの弟子たちを徹底的に迫害するようになります。シリアへ逃れたイエスの弟子を追いかけていって、つかまえ、イエスをメシアと呼ぶことをやめさせようとします。激しく怒りながら、早馬を走らせるサウロでしたが、ダマスコの町に近づいたとき、突然、太陽よりもまぶしい天からの光を見て、地面に倒れてしまうのです。そして不思議にも、天から語りかける声を聞くのです。「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」(使徒言行録9:4,5)。サウロは目が見えなくなり、畏れに囚われながら待っていると、そこにイエスの弟子が現われて、こう告げます。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現われてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたし（アナニア）をお遣わしになったのです」(使徒言行録9:17)。やはり！　あの声は！　死んだはずのイエスの声でした。「イエスは復活した」と言って憚らない弟子たちの主張は、真実だったのです。目からウロコが落ちて、サウロは見えるようになりました。彼は身を起こして、洗礼を受けました。イエスの名を唱えて洗礼を受け、罪を洗い清めていただいたのです。食事をして元気を取り戻したサウロに、イエスの弟子アナニアは、さらに告げたでしょう。「あなたは、異邦人や王たち、またイスラエルの子らに、主イエスの名を伝えるために、主イエスが選んだ器です」(使徒言行録9:15) と。するとどうでしょう！迫害者だったサウロは「イエスこそ神の子である」、「イエスこそキリストである」と宣べ伝える、伝道者パウロに生まれ変わりました（使徒言行録9:20, 22)。

「どうすれば、信仰告白できますか」。この問いの答えを求めているあなたには、サウロが回心した出来事に注目していただきたい。無視していたナザレのイエスを無視することができなくなった。疑っていた復活の主イエスを疑うことができなくなった。イエスの弟子たちを迫害した自分の罪と向き合わないわけにいかなくなった。侮っていた十字架のキリストを畏れ敬わないわけにいかなくなった。自分の意志をはるかに超える神のご意志によって、このように導かれたことを感謝せずにはいられなくなった。サウロはこうして、洗礼を志願したのです。聖書は彼の信仰告白の言葉を伝えていません。しかし「キリストに従う」という信仰告白の本質を描きました。「わたしはキリストに従います」という思いが整えられたら、教会の牧師に志願してください。キリストに従うあなたの言葉と行いも整えられます。

「信仰告白したら、どうなりますか」と不安になったり躊躇したり。そんなあなたには、パウロの召命体験に注目していただきたい。キリストに従ったパウロは、主イエスに結ばれたのです。十字架のキリストとともに死んで、復活の主イエスとともに甦ったのです。キリストの贖いの恵みによって、罪を赦され、神との和解を得たのです。主イエスの復活の命を分け与えられ、新しい人生を歩み始めたのです。「イエス様こそわたしの主、わたしの神、わたしを救ってくださる方、わたしを生かしてくださる方」と、証ししないではいられなくなります。「あなたを生かしてくださる方、あなたを救ってくださる方、あなたの神、あなたの主こそ、キリストです」と、宣べ伝えないではいられなくなります。このような召命体験を、あなたもすることになるのです。信仰告白した人は「聖霊に仕える人」になります。「わたしは聖霊に仕えます」という願いが与えられたら、教会の牧師に相談してください。聖霊に仕えるあなたにふさわしい賜物と奉仕と仲間たちが与えられます。

（二宮　創）

〔今週の暗唱聖句〕　使徒言行録 9章4,5節

サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。
わたしは、あなたが迫害しているイエスである。

7月13日　サウロを回心させる復活のキリスト　幼稚科

〈ねらい〉

神様の力によって、私たちは、「イエス様こそ、わたしの主、わたしの神さま」と告白し、キリストに従う人に変えられます。

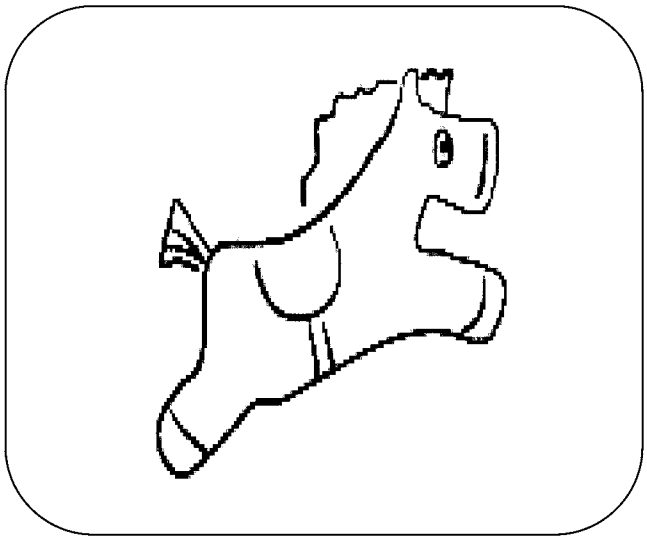
〈展開例〉

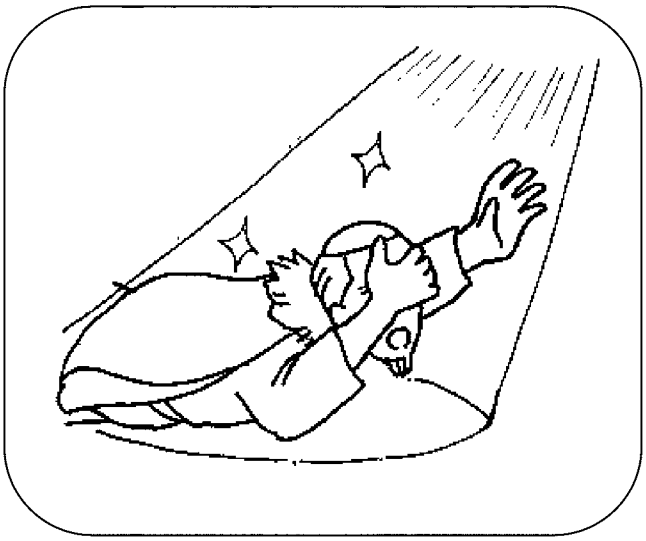
ぬり絵をしましょう。

先生へのひとくちメモ

「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのわたしは、あなたが迫害しているイエスである。」

「馬」から落ちたサウロは、イエス様の光によってかえられました。





7月13日　サウロを回心させる復活のキリスト　中学科

対話の手掛かりとして……。

①いつになったら自分は信仰告白をしたらよいのだろうか、そのタイミングを伺いながら教会に来ている中高生たちもいることでしょう。でもそのためには、自分もあのサウロのように決定的な回心が必要なのだと思い込んでしまっているケースが案外多いのかもしれません。まるで回心することが、「キリスト者になる条件」の一つのように。それに対して、教師たちは、回心・悔い改めは人間の業ではなく、神様がなさることです、と教えることはできるかもしれません。でもそれだけでは、彼らは納得できないのではないでしょうか。「私もあのサウロのような回心体験を通して、キリストを信じる者とされたい」という彼らの気持ちの奥には何があるのでしょうか。個人的な経験から一つ言えるのは、キリストに救われた喜びを実感しないまま、信仰告白することは、神様に対して失礼ではないかと真剣に考えているということです。

②イエス様の救いが心から本当に分かるまで、信仰告白はしない。洗礼を受けないという思いは、単純にわがままだとか、自分に頼り過ぎだといって叱るのではなく、むしろ喜んであげたらよいのではないでしょうか。決して皆がサウロのような回心体験をするわけではありません。皆がサウロと同じような仕方でキリストに出会うわけではないのです。あるいは、誰の目にも分かるようなとても大きな罪を犯さなければ、キリストの救いが分からないということでもないのです。去年のクリスマスに信仰告白をした高校生が、教会学校版の月報の中で、後輩たちこのように語り掛けていました。「信仰告白とは、キリストと一緒にこれから生きていくことを約束します、と神様と教会の皆の前で誓約することだよ」と。印象深い言葉でした。イエス様と一緒に生きていくことができたら、もうそれで十分なのです。なすべきことは、復活の主が示してくださいます（6節）。キリストに従っていく歩みの中で、主の恵みがいかに大きいものであったのかを知ることができるのです。

③今回のテキストを読んでいて、改めて心に留まることの一つは、「見える」という言葉がたくさん記されていることです。そもそもサウロは、すべてが見える人間だと自負していました。だから、キリストの十字架が如何に愚かなものであるのかを分かったつもりでいたのです。だから、キリスト教会を迫害することは正しいことだと信じていました。でも、復活の主に出会って、サウロの目が閉じられます。キリストとの出会いによって、私たちはすぐに目が開かれるわけではないのです。むしろ閉じられるということがあるのです。イエス様のことが分かるということは、変な言い方かもしれませんが、イエス様のことが分からなくなることでもあると思います。「イエス様とはこのような方だ」「自分とはこういう人間だ」と、今まで分かっていたつもりが、いや実はそうではなかったということを経験するのです。だから分からなくなることは、信仰が薄いということでは必ずしもありません。神様の前に自分はまだ未熟だし、従っていける器ではないと思うとき、既にそこに復活の主との出会いがあるのではないでしょうか。ぜひそこでサウロが祈ったように、祈ってください（11節）。そして、アナニアを通して、サウロの目が開かれたように、教会の仲間たちは、その人のために祈るのです。見えなくて悩んでいる自分のことをいつも心に掛けて、祈ってくれる仲間がいることを知っていることは、キリスト者としてのこれからの歩みを支える力となるのです。